

元ヤクザ、司法書士への道

まえがき 7

第1章
すべては「独居房」から始まった……………15

「懲罰」志願 16 / 民法を丸暗記して分かったこと 19

退屈だった「美しい星の町」 21 / 「お前の人生」と言ってくれた父 23

思春期に湧き出した「不良の血」 25 / 背中 of 般若 28

「お前は将来、ヤクザになる」 30 / 誰かに雇われたくない 32

鑑別所から少年院へ 33 / 半グレに流れる若者たち 36 / 十八歳の「社長」 38

竹垣会長との出会い 39 / 会長の教え 42 / 宅見勝若頭射殺の衝撃 44

報復の連鎖 46 / 右翼団体を率いて 48 / 「過払金訴訟」で一儲け 52

三十八歳、再び「塀の内側」に 54

第2章

ムシヨで俺が学んだこと……………57

四十にして立つ 58 / 前科者の「壁」 60 / 司法書士とは 63

世間への「解衣推食」として 67 / まずは「民法」を丸暗記 69

司法書士の「三千時間」 71 / 思い立ったときに戦闘開始のときだ 74

修学旅行みたいなムシヨ暮らし 75 / 生き方を更める 78

ムシヨで寒さに震える 80 / 刑務所の「老老介護」 82 / 最悪の「ムシヨ飯」 84

刑務官による暴行も 86 / 法的根拠なき「規則」 89 / 「オヤジ」の顔を立てる

規則づくめの生活 94 / 懲役の定番「アルフォート」 96 / 刑務所の存在意義 98

なぜ刑務所では更生できないのか 101 / 出所者に対する冷たい風 103

輸入車販売業者からのドタキャン 105 / 消えない烙印 107

元暴力団員は携帯電話も持てない 109 / 「拘禁刑」新設で再犯は防止できるか 112

第3章

一念発起……………115

初戦敗退 116 / 宅建に挑戦 118 / 司法書士と行政書士 120 / 「土業」とは 122

成功への近道は努力の積み重ねだ 124 / 自分を信じろ。かならず道は拓ける 126

本文構成 青山敬子
装幀 高橋忍
写真 石川奈都子

まんがき

暴力団に十年以上所属した男性が昨秋、合格率約三パーセントの司法書士試験に合格し、岡山市で開業した――。

俺の司法書士試験合格を最初に報じたのは、二〇一九年七月十日付けの毎日新聞だった。

記事には、こうある。

「組から足を洗った後に入った刑務所で民法の丸暗記を始め、八年越して難関を突破して夢をつかんだ。全国暴力追放運動推進センター（東京都）によると、飲食店や建設業を始めた元組員はいるが、司法書士試験にパスした例は把握していないという。

男性は甲村柳市さん（47）。『子どもの時からやんちゃで、暴力団に興味があった』という。二十代前半、スナックで知り合った元組員とみられる男性に誘われ、兵庫県姫路市に拠点があった指定暴力団・山口組系の三次団体の組員に。岡山市で人材派遣会社を経営する傍ら、組員が事務所集まる定例会に毎月欠かさず出席し、月一回の電話番もした。組長の車列に加わり、ボディガードも務めた」

厳密に言うと、俺は子どもの頃はむしろおとなしくて、不良に興味を持つようになったのは中学生になってからだだったりするし、また細かいところもちょっと誤解があるが、おおまかなところは記事のとおりである。

俺が「山口組組員」として活動していたのは、一九九三年頃から二〇〇五年の約十二年ほどで、その後は右翼団体を率^{ひき}いたりもしていた。それを含めると二十年くらいの「不良生活」だった。ムシヨには通算で約十年ほど務めている。

二十年か……長かったねえ。

思えば、俺は今までいろんなビジネスをやってきた。

中学を卒業してすぐに社会に出て、飲食店のアルバイトから始めて、十八歳で建設現場の労働者派遣事業の会社を作ったり、興信所やキャバクラ経営までいろんな会社を自分で作ってはつぶしたりしてね。知人はもちろん、中古車屋やスナックなどから頼まれて債権回収^{さいけん}もしたし、またサラ金の過払金返還請求訴訟^{かばいけん}では、依頼者から債権を譲渡してもらおう形で、自分が原告として訴訟をして返還請求をしたりもした（専門的に言えば「不当利得返還請求訴訟」という方法である）。こんな感じではいろんなビジネスを手がけて、そこそこ儲^{もう}かっていたが、「一生安泰」というほど溜^ため込んだわけでもない。当時は、

いわゆる「宵越よいぞしのカネを持たない」というタイプだった。

四十歳を間近に自分の人生をムシヨで振り返り、これからの自分に何ができるか考えたとき、司法書士試験の突破を思いついた。商売柄、司法書士とは付き合いもあったし、どういふ職業かもだいたい分かっていた。あのくらいなら、現場で「実務」をやってきた俺ならば楽勝だとも思っていた。ところが実は、司法書士試験は合格率三パーセントという難関だと知ったのは、勉強を始めてしばらくしてからだった。だが、すぐに気持ちを入れかえた。「誰でも合格するような試験なら受けても意味はない」と。

話を戻すが、この毎日新聞の記事が呼び水になったのか、今まで何回もメディアの取材を受けているが、そのたびに「元暴力団員が心を入れかえて出世をした」みたいなストーリーで書かれているのは、ちょっと心外なところもある。

ヤクザとして生きていけば、組織のために罪を犯したり、刑務所に入れられたりと、苦しいとか辛いことは腐るほどあるが、俺はヤクザとして生きたことに後悔はしてない。

後悔しないように、自分に言い聞かせているだけかもしれないけれど、自分で選んだ道を「失敗だった」みたいに他人から言われるのは正直、不愉快である。

そもそも自分で選んできた道なんだから、後悔してもしかたない。

だいたい、過ぎたことをいつまで後悔していても、何かが変わるわけでもない。大事なのは行動だ。地道に慎重に生きていくというのも手堅いだろうが、人生は「当たって砕けろ」のチャレンジを繰り返して切り拓いていく——という考え方もあっていいと思っっている。俺はむしろ、失敗を恐れず、後悔をすることなく生きていた。後悔なんかしている暇はない。

これは子どもでも大人でも同じ話だ。

一番よくないのは、失敗を恐れて何もしないことだ。できない理由を考えてもしたかない。

それに失敗も「成功への布石」と考えればけっして無駄にならない。思うとおりに突っ走ればいい。

もちろん度胸は必要よ。

言っとくけど、俺は特別ななんかじゃない。

中卒で前科者。そして元暴力団員。世間の基準からすれば超のつく「低スペック」だ。でも負けたくなかった、自分自身に。

信念と執念。こいつを味方にした奴は強い。そう信じて生きてきた。そしてそれは間

違っただけでなかったと今も思う。

そのことを俺に教えてくれたのは矢沢永吉さんだ。

永ちゃん（と呼ばせていただく）は俺の人生に大きな影響を与え続けてきた。だから俺はここまで走り続けて来ることができたのかもしれない。

デビューから半世紀あまり、古希（七十歳）を過ぎてもマイクを握り、颯爽とステージに立つ姿に俺は魅了されている。怒りや苦しみ・つらさのすべてをHappyに飲み込んでいく。その生き方が太陽のようにジリジリと俺の脳裏に、そして身体に爪を立てる。

ご存じの方も多いと思うが、一九四九年に広島で生まれた永ちゃんは、貧しい幼少期を過ごし、「寂しかった」記憶しかないという。そんな中で中学生のときにラジオから流れるビートルズの曲に出会い、ミュージシャンとして生きることを決意したそうだ。

高校卒業後すぐに東京を目指すが、夜行列車の長旅で疲れた永ちゃんは、東京駅ではなく手前の横浜駅で降りてしまう。そして、そのまま喫茶店やレストランでバイトをしながらかつて酒場やクラブでバンド活動を始め、現在のキャリアの第一歩を踏み出す。

俺が初めて聴いた永ちゃんの曲は、この横浜での時間をモチーフにした『YOKOHAMA二十才まえ』（作曲／矢沢永吉、作詞／ちあき哲也）だった。一九八五年にリリースされ

た同じタイトルのアルバムからシングルカットされたものだ。

中学生の永ちゃんがビートルズにしびれたように、この曲を聴いたとき中学生だった俺の身体の奥から心臓の鼓動が鈍い音をたてて鳴り響いていた。

さがす夢は大きすぎて

恋はただの遊び道具

当時からマせていた俺は、永ちゃんの世界観にすっかりハマってしまった。

それから今日まで永ちゃんは俺の人生の目標であり、百万部を突破した著書『矢沢永吉激論集 成り上がり』（一九七八年、小学館）や続編『アー・ユー・ハッピー？』（二〇〇二年、日経B.P.）は今でも俺の人生のバイブルだ。

永ちゃんの魅力は語りつくせないが、オンリーワンの音楽性とともに自然体でポジティブな姿勢が素晴らしいと思う。

『成り上がり』って、いい言葉だ。「BIGになりたい」と公言し、「カネのための音楽」を否定しないのは、後にも先にも永ちゃんだけだろう。

子どもの頃から苦勞したこともあって、綺麗きれごととはけっして言わず、根性もハンパではない。信賴していた人間に裏切られて三十五億円もの借金を背負わされたときも、六年で返済した。

この件を「借金で」髪は抜けたし、過呼吸にもなったが、完済できて俺はラッキー」と笑顔で振り返る姿には脱帽だ。一般人だけでなく、芸能界や政界、スポーツ界にまでファンが多いのもうなずける。

二〇二二年十二月の武道館百五十回目（過去最多）のライブは喉の不調で延期されたが、早期の再演についてテレビで明かしている。

借金や公演中止などの困難にも絶対に負けないのが永ちゃんだ。海外にはザ・ローリングストーンズやエアロスミスなど、メンバーが七十代でも人気のあるバンドはたくさんあるのだから、当然だという。

ずっと前からトップアーティストだが、走ることをやめない姿には尊敬しかない。けっして負けない。何があっても諦めない。死ぬまで走り続けたい。

すぐに夜は明ける。死ぬまでの長い旅だ。
永ちゃんはそう俺に教えてくれる。

そう、誰にでも「可能性」はある。

俺もただ、その可能性に賭けてみただけ。自分を信じてね。単純なことよ。

読者の皆さんには、努力をもって挑めば、だいたいのことは達成できることに勇気と希望を持ってほしい。目的を達成できなくても、積み重ねた努力はムダにならないしね。そんな思いをこの本に書いてみた。

綺麗ごとは嫌いだから、包み隠さずに思いを綴った。

読んで嫌悪感を抱くこともあるかもしれない。

そんなときは、この本をゴミ箱にぶちこんでくれていい。

そして、この本を手を取ってくれた人には、心から感謝している。
ありがとうございます。

二〇二三年四月

甲村柳市
こうむらりゅういち



第1章
すべては
「独居房」
から
始まった

「懲罰」志願

二〇一〇年冬、広島刑務所。

俺のいる独居房の、ドアにある覗き窓の狭い隙間から見える看守の二つの目が、俺の様子を
確認する。

(よし、ちゃんとドアに向かって、坐っている。甲村も反省してるようだな)
看守は黙っているが、おとなしくしている俺の姿を見て安心したようだ。

独居房とは読んで字のごとく、一人だけが収容される監房である。

広島刑務所では普通、受刑者が収容されるのは六人が定員の雑居房だ(法務省資料)。もともと
当時は刑務所はどこも定員オーバーで、一つの房に八人、下手をすると十人が押し込められた。
だから受刑者の多くは一人暮らしの独居房を希望する。希望者の順に独居房に移るのが通例
だ。

だが、俺の場合はおとなしく順番を守っていられるほど悠長じゃなかった。というのは、独
居房でノンビリしたいというのではなく、はっきりした目標があったからだ。それが司法書士

の勉強だ。

だから俺は、看守に対して反抗的な態度を取って独居房送りとなった。

四十五日間、懲罰のために独居房にいる間、ルーティンの刑務作業は免除されるが、その代わり、丸一日、ドアに向かって坐っていないなくてはならない。さすがに正座では膝を痛めるから、胡座あぐらである。もちろん、疲れたからといって寝転ねころんだり、立ったりするのは許されない。トイレに行くのも許可がいる。

何もしないで坐っているのは楽なことのように思えるかもしれないが、こんな退屈なことはないし、むしろ苦痛である。

禅寺でも坐ざぜん禅は一回がおおよそ四十分、線香が一本燃え尽きるまでの時間が区切りになるという。坐禅ならば、そこで一息つけるのかもしれないが、ムシヨの場合はそうではない。とにかく「休みなしで坐っている」と命じられる。足はもちろんしびれるし、ドアを一日中見ているというのは頭がおかしくなりそうになる。

だが、定期的に看守が様子を見回りに来るから、言われたとおりにやらないといけない。何時間かおきに独居房のドアにあげられた小窓から、看守が覗き込む。そのとき、ドアに正対してちゃんと坐っていないとドヤされる。

だが、俺の場合は叱られることはなかった。なぜならば、その看守のぞき込む小窓をじっ

と見つめていたからである。

小窓の下には、俺があらかじめ仕込んであった「民法」の条文が米粒で貼り付けられている。俺はそいつを一生懸命、見つめては暗記していたからだ。

手紙用の便箋びんせえんにはびっしりと小さな文字で、民法の条文が書かれている。たとえば、こんな具合だ――。

第七〇九条【不法行為による損害賠償】 故意又は過失によって他人の権利又は法律上保護

される利益を侵害した者は、これによって生じた損害を賠償する責任を負う。

この暗記用のペーパーは俺自身があらかじめ作っておいたもの。ムシヨでの私物は極端に限られてはいるものの、差し入れられた雑誌や本、外界に手紙を書くための封筒や便箋はOKだ。しかし、懲罰が始まったら、もちろんそれらを独居房に持ち込むわけにはいかない。

そこで俺が考えたのは、懲罰が正式に決まり、懲罰が執行されるまでの数日間をフルに活用して（懲罰が正式決定するまでは比較的時間に余裕がある）、私物の六法全書から覚える分の民法を必死にボールペンで便箋に書き写す。第三者には写経をしているように見えただろう。

民法を丸暗記して分かったこと

ちなみにこの時代、民法は実質一〇八七条だった（二〇二二年改正で同一一二一条に増えた）。それをできるだけ小さな文字で（俺は幸い、目がいいので小さな文字でも大丈夫だ）、ひたすら書く。一枚書いたら、排便姿を隠すため独居房に備え付けてある衝立に張られたカレンダーの裏に、見つからないように隠しておく。そいつを引っ張り出して、看守が覗く小窓の下の壁に米粒で貼り付ける。

ここまで書けばお分かりいただけるだろう。俺が独居房に入ったのは自分で望んだこと。看守にあえて反抗的な態度を取って、「懲罰！」ということになった。

ではなぜ暗記するのが「民法」なのか？

それは俺が目指していた司法書士の国家試験をパスするために、必須の知識だったからだ。

司法書士とは何かというのはおいおい説明するつもりだが、ここではその合格率がわずか三パーセントであるということを書いておけば充分だろう。要するに国家試験としてはかなりの難関だということだ。ちょっと参考書を読んで練習問題を解けばいいというものではない。そ

もそも専門の資格スクールで配られる司法書士試験のテキストや問題集を積み上げれば軽く一メートルにはなる。

しかも俺は中卒で、卒業以来、勉強なんかしたことはない。そのときの俺はもう四十歳が目の前。つまり二十五年近く、勉強とは無縁な生活をしてきた。それどころか何回、ムシヨに入ったか分からない。

そんな俺が民法を暗記するなんて、他人がいる雑居房にいたら、何百年かかってもできるはずがない。そもそも平日は刑務作業があつて、本を読む時間だつて限られている。勉強なんてまず無理だ。

だから、司法書士試験を目指す俺としては、独居房に送られるという選択しかなかったわけだ。

この話をすると、たいていの人は「本当にそれで法律を暗記できるのか」と疑うが、人間の頭というのは凄い能力を持っている。俺自身も驚くぐらい、法律の条文が頭に入ってきて暗記することができた。他にやることはないといえ、中学しか出ていない俺だ。その俺がこうして条文が暗記できるんだから、この能力はきつとみんな平等に備わっているものだろうと思う。中には「丸暗記しただけでは実力はつかない」と言う人もあるかもしれない。しかし、実際に丸暗記していくと分かるが、覚えた条文が増えてくると前後の関係などから条文の意味が自

然に分かってくる。覚えるのが楽しくなってくる。

数時間おきに、覗き窓から俺の様子をチェックしてきた看守連中からすると、言われたままに坐っている俺を見て、「さすがの甲村も懲りたやろ」と思ったに違いないが、実はちっとも懲りてなかった。なぜなら、俺は試験勉強をするために、この四十五日の独居房生活を何度でも繰り返しやろうと思っていたからだ。

退屈だった「美しい星の町」

一九七二年四月、俺は岡山県の山奥で生まれた。現在の井原市美星町、当時は小田郡美星町といった。

美星町とは、まるでおとぎ話とか絵本の中に出てきそうな地名だ。この町名は戦後になって近隣の村が合併したときに新たに作られたらしいが、その一つは星田村と言い、星尾神社という古い神社もある。昔から空が澄んでいて、星がきれいに見えることで有名だったようだ。

元々、岡山は瀬戸内海に面しているので晴れが多く、天体観測に向いているのだが、美星町は昔からこの夜空の美しさを売り物にしてきて、天文台を招致したり、また全国に先駆けて「光害防止条例」を一九八九年に制定・施行したりしている。無用なネオンや街路灯があると天体

観測の邪魔になる。それを「光害」というのだが、家電メーカーと協力して天体観測の妨げにならない街路灯などを設置し、それが認められて、二〇二二年には世界的なNPO団体から「星空保護区」というのにも指定されたそうだ。

そうした活動が広く知られるようになって、今では夜になると近隣の街などからたくさんのカップルが星空を見るためにやってくるデートスポットになっている。

だが、ガキの頃の俺にとってみれば、「夜空が美しい」なんてロマンチックなことは関係ない。むしろ、夜は真っ暗になる、退屈な田舎町だ。

幸い、俺の場合は幼稚園に入る前に、両親と倉敷市へ移ったのでよかったが、親父の両親はずっと美星町に暮らしていたから、休みにはよく親父に連れられて行ったものだった。

俺のじいちゃんは歯医者で、松茸山も持っていて、けっこう裕福だった。遊びに行くと松茸をたくさんもらったし、ばあちゃんは、いつも子どもには多すぎる小遣いをくれた。買うのはプラモデルとか「キン肉マン消しゴム」とかで、子どもらしいものだった。

そんなわけで、美星町のじいちゃん、ばあちゃんは大好きだったが、美星町が好きかといえば、微妙だった。出かけるような場所もないし、近所に同じ年くらいの子どものもない。

この美星町から倉敷に引っ越した当初は、田舎育ちのせいか無口でおとなしいガキだったが、幼稚園に入ると、先生のスカートをめくって叱られたり、同級生の男の子の手を鉛筆で刺した

りと、少しずつヤンチャな一面が出てきた。

ちなみに美星町の星が「美しい」と気付いたのは、つい最近だ。七、八年くらい前に一人でクルマで見に行ったときだった。

その頃は司法書士試験の勉強を来る日も来る日も続けていたから息抜きも必要で、だから思いついてクルマで夜の美星町に久しぶりに行ってみたのだ。

クルマの窓から見える美星の空には、手を伸ばせば届きそうな無数の星がきらめいていた。それをずっと眺めながら、「新しい人生、絶対にこの手で掴み取ってやる！」と誓ったものがある。

「お前の人生」と言ってくれた父

倉敷市内の小学校に入ったのは、一九七九年。

俺は小学校に入っても相変わらず目立たないガキだった。勉強は最初から苦手で、まったくやらなかった。それでも、成績は中の下あたりをウロウロしていたのだから、今から考えると不思議だ。

学校での楽しみはバスケットボールである。昼休みなどは、同級生たちと毎日のようにボー

ルを追いかけていた。

だが、休みの日はほとんど家で過ごした。

家から学校まで距離があつて、バス通学だったので、わざわざ休日に出かけて友だちと遊ぶことはほとんどなかったというのもあるが、でも基本的には他人とつるむよりも自分の世界に引きこもつて遊ぶのが好きな子どもだった。

家では菓子を作つたり、近所で釣りをしたりして過ごしたものだ。

菓子作りが好きな子どもだったと言うと驚かれるが、こういう一人の仕事は今も好きだ。俺が経営している東亜国際合同法務事務所のスタッフに手作りのランチをふるまうのも、いつものことである。時に思いついて、刑務所で食べたラーメンなどを再現したりして、楽しくやっている。釣りに行けば、もちろん自分で捌さばいて料理もして、釣り仲間たちと一緒に食べる。これは本当に愉快的な時間だ。

ガキの頃は、実家の本棚から引っ張り出した母の料理の本を見て、クッキーやケーキを作り、家から歩いて五分ほどの池で一人釣り糸を垂らしていた。釣れるのはもっぱら、外来種のブルーギルばかりで、食べてもうまくない。だからブルーギルの口とかエラに爆竹を仕掛けてぶっ飛ばして遊んでいた。昭和のガキの遊びなんて、そんなもんだらう。

本はよく読んでいた。ガキの頃は家にあった日本の少女小説が中心だったが、タイトルは一

冊も思い出せない。外国の小説は、日本で一九八六年に発売されたシドニー・シェルダンの『ゲームの達人』などを読んでみたが、登場人物の名前が覚えられず、退屈で途中で投げ出してしまったことを覚えている。

バスケのようにチームで動くのも好きだが、一人で何かをするのも好きな、変わったガキだった。

両親と妹は俺の作った菓子を食べていたはずだが、特に褒められたり、逆に「男らしくない」と叱られたりしたこともない。もともと両親も妹も物静かでゆったりした性格なのだ。

ちなみに父親は定年まで地元造船所でサラリーマンとして働いていた。つまりカタギの家である。

だが思えばヤクザになったときも、司法書士になったときも、特に両親から何かを言われたことはない。「お前の人生なのだから、好きなように生きてほしい」ということなのだろうが、はつきりとそう言われたこともない。俺も家族もみんな口数が少ないのだ。

思春期に湧き出した「不良の血」

中学校に入ると、部活は柔道部を選んだ。理由はもちろん「力」のためである。その頃の俺

は「力こそすべてだ！」と、頑かたくななまでに暴力を信奉していた。

小学生までは家で菓子を作るようなガキだったのに、俺は中学に入る頃から急にヤンチャになった。そういうことは世間ではよくあることだろうが、俺のように変わり方が激しかったのはちよっと珍しいとは思う。両親もおとなしいのに、こんな「不良の血」が湧き出してきたのはちよっと不思議でおもしろい。

持久力に自信がなかった俺は、「喧嘩けんかはとにかく速攻ソックだ。腕力けんかでねじ伏せるしかねえ！」とマジで考えていた。

当時の不良にとっては、喧嘩で勝つことが何よりのステータスだった。と言っても、さすがに自分よりも身体の大きな奴に、素手ではかなわない。そういうときには道具も使った。だが、時代は変わった。今では俺も「男は腕力」とは思わない。

俺たち不良はいつもつるんでは仲間意識を確認しあい、不良グループの「輪」のようなものも形成されていった。こうした不良たちとつきあうことで、交友関係も変わっていき、小学校時代にバスケで遊んだ仲よしたちとは縁が遠のいていった。

俺は、柔道の稽古けいこのほかに毎日五百回の腕立て伏せと腹筋運動の筋トレも続けたが、かえって腰を痛めてしまい、今もなんとなく腰痛持ちである。

それでも当時は喧嘩にだけは自信があった。

昭和の頃は、学校も会社も週休二日制ではなかった。その頃、土曜日は「半ドン」と言っていて、午前中だけ授業がある。だから、土曜日は学校に行つて、そのまま隣町に仲間と一緒に繰り出すのである。まったく関係のない中学校にいきなり乗り込んだり、町をうろついている不良を適当に捕まえたりしてはよく殴っていた。そして、相手のポケットの中に手を突っ込んでカネを取り上げ、そのカネで飲食や買い物をするのである。

今では中学生でもこんなことをやれば、間違いなく「強盗傷害」として逮捕だが、当時は恐喝程度の事件などたいしたことはなく、被害者も警察に駆け込んだり、親や学校に泣きついたりすることはなかった。

俺たちの「遠征」はたいがい成功だったが、たまには失敗もある。

あるときなど、のちに有名プロボクサーになったTのいる不良グループと取っ組み合いになりそうになった。相手は十五人近く、こちらは三人である。

これはさすがにまずいのう……と思いつつも、ついに殴り合いが始まったとき、「お前ら、やめんか、コラッ！」と声がした。

商店街の肉屋のおっさんが、包丁を持って止めに来たのである。みんな文字通りクモの子を散らすように逃げ、俺たちは通りがかりのバスに飛び乗った。

バスの中でほっとして、三人で「助かったのう」と笑い合つたのを覚えている。そのへんは

まだまだガキだった。

背中はんにゃの般若

そして、週末の夜は、たまり場になっている仲間の家に集まってはカラオケボックスに行ったり、深夜から日曜日の夕方まで盗んだバイクや改造車を乗り回したりしていた。暴走族から譲ってもらった車検もないクルマのハンドルを握り、無免許で出かけるのである。ガソリン代や飲み食いの費用は、みんなで数千円ずつ出し合っあてていた。

暴走族には知り合いもいたが、俺はそこに加わりたいとは思わなかった。当時からクルマが好きだったし、悪天候のときもクルマのほうが断然便利なので、バイクにはほとんど乗らなかつたというのも大きな理由だ。

クルマと言えば、最初は友人の母親が持っていた自動車をコッソリ拝借しての無免許運転である。エンジンをかけると音で分かってしまうので、そいつの家から少し離れたところまでみんなで押して、離れてからエンジンをかける。運転は動かしているうちに自然に覚えたが、よく事故を起こさなかつたものである。

友人もみんな少年で無免許運転なので、警察に追い回されては逃げる、の繰り返しであった。

一九七〇年代後半の不良たちは、みんなこんなものだったのではないか。ずいぶんのんびりしていた。

俺は、ゲームにも興味がなかったから、当時からゲームセンターにはほとんど行っていないのだが、なぜかゲーセンに設置されている自販機のうどんは好きで、よく食っていた。今でもたまに食べる。

聞くところによると自販機のうどんは西日本では有名だが、東日本にはあまりないらしい。めちゃくちゃうまいわけでもないのに、今でもつい食ってしまうのは我ながら不思議だ。

タバコは中学生から吸っていたが、クスリ（＝違法薬物）の類は一切興味がなかった。不良仲間の中にはシンナーを吸っているヤツもいたが、俺はバカにしていた。涎を垂らしながら呂律の回らない、バカみたいなしゃべり方をするヤツらはマジで嫌いだった。

「俺は絶対にこんな格好悪い姿をさらしたくねえな」

昔も今もそう思ってきた。酒もきれいに呑んでいるつもりである。

そもそも変なものをカラダに入れるのがイヤなのだ。病気を患って病院に行くことはあったが、処方された薬をまともに飲むのも避けた。

とはいえ背中には立派な般若が彫ってあるので、矛盾していると言われればそのとおりで、これは反論のしようもない。ま、人間というのは矛盾の塊だ、ということにしておこう。

元ヤクザ、司法書士への道
甲村 柳市・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：1,760 円（10%税込）
発売日：2023 年 6 月 26 日
I S B N：978-4-7976-7432-3

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)